寄稿

私たちはなぜ地域共生社会をめざすか

NPO法人 ホッとスペース中原代表 佐々木 炎

「地域共生社会」は、地域包括ケアシステムの理念を高齢者だけではなく、介護・福祉や医療といった分野や世代を超えて、生活に困難を抱える人への包括的な支援として構築しようとするものであり、社会の機能そのものを大きく変革するコンセプトと言えます。背景には、かつて地域社会に働いていた、相互扶助や家族同士の助け合いなどの機能が低下していることが挙げられます。暮らしにおける人と人とのつながりが弱まるなか、これを再構築することで誰もが役割を持ち、お互いに配慮し、存在を認め合い、支え合い、誰もが孤立せずに、その人らしい生活を送ることができる社会を目指す。そうした社会を「地域共生社会」と呼んでいるのです。

地域共生社会を実現するには、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源がつながる必要があります。国の財政難による保険給付の抑制や削減も、地域共生社会を推進する一因です。しかし、私たちの社会は、その現実を差し置いても、「共生」という“福祉”を必要としているのです。（一部、厚生労働省の「地域共生社会の実現」を改正）

地域で相互の関係を育むために

通常、地域共生社会実現に向けての取り組みは、2つの方向から考えることができます。ひとつは「官製主体型」です。行政主導のもと、専門職が中心になって行っている地域包括ケアシステムや、厚生労働省が推進するプロジェクトなどがそれに当たります。もうひとつは地域住民が主導する「住民主体型」です。私たち「ホッとスペース中原」の取り組みは、これらの「官製主体型」でも「住民主体型」でもなく、行政、専門職、宗教、地域住民が混然一体となった「公共型」の試みと言えるかもしれません。

私たちの活動は、「地域に互助の関係が育まれたら良いなあ」という思いに背中を押されて始まりました。その漠然とした思いを、型にはめず、行政や学識者、諸団体によって文字化された地域共生社会への多様なアプローチを参考に実践しています。実践に際して、今まで大切に育まれてきた地域社会の資源とは、敬意をもって協働することを心掛けています。特に社会福祉協議会の長きにわたる働き、善意で存続してきた小さな民間団体、主義・主張を超えた政党や宗教団体との協力などは欠かせません。

私たちの法人は①高齢者支援／介護保険（通所介護・訪問介護・居宅介護支援）、②障がい者支援（グループホーム・ヘルパー派遣・計画相談）③子育て・子ども支援（親子広場・ヘルパー派遣・学習支援、里子ホーム）④権利擁護支援（成年後見人制度・触法者支援・交流カフェ、当事者集会）を行っています。1998年から活動を始め、少しずつ活動範囲を広げてきました。まだ介護保険制度がなく、「官製型通所介護」では集団レクを中心とした1回の利用料が500円であった時代に、私たちは利用者主体の「民間型」の通所介護を1回4000円で始めました。画一的な通所介護ではなく、一人一人の尊厳が大切にされる個別ケアを提供したいという思いからでした。

支えられる側から支える側に

子育て・子ども支援の「親子ふれあい広場」も1998年から始めました。私たちの地域は都心のベッドタウンであると同時に、IT関連の大企業も存在することから、企業戦士の家庭でたくさんの母子が孤軍奮闘しています。子どものための集いはあっても、親たちの居場所がないという声を聞いたことをきっかけに、通所介護の空き時間を利用して、外国人の方に英会話教室を開いてもらいました。結果的に、1回100円でお母さんたちが知的好奇心を刺激され、コーヒーを飲んでくつろぎながらおしゃべりをする居場所になりました。

その間は、お母さんたちがくつろげるように、地域のボランティアさんが子守りをしてくださり、0歳から就学前までの子どもの遊び場も開かれました。お母さんたちはいつしかネットワークをつくり、家族ぐるみのお付き合いが始まり、病気などの時には助け合う関係が自然に生まれました。今では「親子ふれあい広場」が終わると、母子が通所介護の利用者さんたちと交わり、世代間交流が生まれています。お母さんたちは要介護者から育児の助言や労いの言葉を掛けられ、要介護者は子どもからなつかれ、笑い掛けられ、赤ちゃんはたくさんの人から愛情を注がれ、誰もがお互いにケアし合う関係性が築かれています。かつて「親子ふれあい広場」を利用したお母さんたちの中には、当法人の事務、調理、看護、介護等で職員として高齢者や障がい者のケアに携わっている方もいます。

やがて、「親子ふれあい広場」で育った子どもたちの中から、学習につまずく、学校になじめないなどの相談を受けたことから、「学習支援」も始まりました。すると、同じ悩みを抱える近隣の子や外国籍の親を持つ子、貧困家庭の子、発達障がいの子たちがつながるようになり、その相談を障がい支援の専門職が担ってくれました。今では、その子たちが大学生になり、何人かは福祉の仕事に携わる夢を持って頑張っています。

はじめは地域の方々に施設に来てもらうことから

私たちの法人では、積極的に地

域の方々に来ていただきました。地域の保育園や小・中学校、高校と協力し、介護実習生も受け入れました。実習受け入れ校は常時7校ほどです。実習生たちがその後もボランティアとして、食事作り、おやつ作り、音楽やゲーム、話し相手や掃除に参加してくれるようになりました。バザーや夏祭り、外出やクリスマス会には、その他、介護保険を利用して関わりのあった利用者さんの子どもやお孫さんがボランティアとして参加してくださり、利用者家族から職員になった方もいます。

また、採れたての野菜や家で使わない物品を提供してくださる方もいます。さらに、専門知識と資格を持つ利用者家族の方が、私たちの活動の助言をしてくれるようにもなりました。私はこれらの体験を通して、地域に出ていく前に、施設を地域化することが大切だと痛感しています。

＜壁を外す＞：施設に地域の人たちに来てもらう工夫をする
↓
＜風穴が開く＞：交流で風通しの良い施設となる
↓
＜課題共有＞：お互いに課題が見えニーズが見える
↓
＜地域貢献＞：地域の方々と施設で相互扶助が育まれる

縦割りを超えた活動

また、地域住民の交流を目的とした「ホッとカフェ」という活動を行っています。巷には「認知症カフェ」「子ども食堂」等の素晴らしい働きがあります。私たちも後に続こうと、何度か試行錯誤しましたが、少し形態を変えてみることにしました。参加者から「認知症」「貧困」と規定されたくないと、拒まれることが少なくなかったからです。そこで、私たちは「カフェ」に来る人の対象を決めないことにしました。「ホッとカフェ」は「誰でも来られる居場所」になり、0歳から90歳代までの様々な市民が集まっています。子どもは無料で、食べ終わったら別室で遊びます。大人は200円で食事をし、お茶やアルコールなども飲みながら、自分の問題や愚痴を語り、対話します。そこには貧困、離婚、育児の悩み、ひきこもり、不登校、介護、精神疾患、親子関係の不和、非行、ＤＶ…、多様な生きづらさを抱える人が集まっています。

しかし、私は対話以前の前提として、語る人も聞く人も、等しく同じ人間だという認識が大切だと考えています。私たちにはケアのために関わる、という無意識の前提があります。確かに、人には経済的な困窮、家族の課題、育児の悩み、人間関係、そして時には介護の問題などがあります。誰でも人生の途上で多様な課題にぶつかります。しかし人は、その中でなんとか生活を維持し、自分なりの幸福を得、成長していく全人的な存在です。ですから私たちは、「ケアを受ける人と与える人を分断」しないことが重要だと考えます。ケアを必要とする方々に、「ケアの対象」というレッテルを張り、分断し、一方通行のケアを提供し、「他人事」で終わりにしないのです。すべての人はケアを受けながら同時にケアをしており、ケアするときに“人”になっていくという「ケアリング」が大切なのです。

また、人は共に生きる「仲間」として互いを受け入れ合い、「共同体」の中で生きる存在です。共同体があれば、生きづらさを独りで解決しなくてもいいのです。私は触法者支援（少年院や刑務所からの出所者）を通して、そのことを実感しています。住む所と仕事、そして支える縁（支縁）である共同体があれば、誰でも自分らしく生きることができます。

共同体は、一人のケアを必要とする人のために立ち上がり、困難にある人を助けます。社会全体が共同体として機能するとき、人は共同体の支えによって「自立」します。自立の前提に「相互扶助」があるのです。ケアは、他者の苦しみや痛みへの共感で成立する。私たちはこの当たり前なことをもう一度取り戻すべきではないでしょうか。

なぜ地域共生社会か

私たちは、なぜ地域共生社会を目指すのでしょうか。それは市場価値があるとか、流行っているからではありません。私は、地域共生社会は、近代社会の基礎を築いた、ルソーの「社会契約論」につながっていると思っています。ルソーは、「人は生まれながらに自己愛と他者への思いやりを持っている」と言っていますが、これは地域共生社会の「互助の精神」につながっているような気がします。その意味では、人類の誕生から、この精神で脈々とケアが行われ続けてきたのです。私は、それを取り戻すことが大義だと感じています。

私たちは互いを思いやり、共に生きるという人間の姿を見失っていないでしょうか。私たちはお互いを人として認め合い、ケアし合わなければ存在できないのです。私たちは利害や打算的な関係ではなく、痛みや苦しみを感じ合う関係を取り戻すことを求められていると思うのです。この世界観に立たなければ地域共生社会の活動は続けることができません。ケアを、公的機関だけ、専門職だけ、地域だけ、家族だけに分割することなく、連帯意識をもって共に生き、他者への関心、課題への気づきによって「共同体」で行う意識を取り戻すことが必要です。

このように地域共生社会は、専門職、利用者や家族、地域の方々が互いを人として認め合い、ケアし合う関係を築いていくことで機能し、成立します。まさにマクロで「社会創造」、「人間復興」の精神も含んでいます。このことを意識しながら、これからの地域のあり方を考えていきたいものです。

「ケアとは、ケアする人、ケアされる人に生じる変化とともに成長発展をとげる関係を指しているのである」（「ケアの本質」Ｐ１８５・メイヤロフ著」）